

再活性化

2020年10月～

2020年春、新型コロナウイルス感染症対策のため、同年前期、学内での実習授業も中止を余儀なくされた。さらにこの年、担当教員の井上明彦が総合基礎実技運営委員長となり、前年同様、つちのいえの授業は行えなかった。

後期になって、十分な感染症対策を前提に実技授業も可能になり、10月、久しぶりにテーマ演習としてつちのいえを行った。

集まった学生は、中国人留学生の鄭天雨(陶磁器M1)を含め、学部生7名、大学院生4名の計11名。専攻も日本画、彫刻、構想設計、ヴィジュアルデザイン、総合芸術学と多彩であった。

10月15日、「やりたいこと」の発表会は活発で、生き生きとしたアイデアが次々出てきて、初期のつちのいえを想起させた。

いくつかの案は重なり合い、かまどづくり、階段の再普請、横穴を掘るの三つの活動がスタートした。



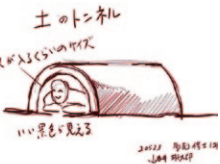
たまり場をつくる



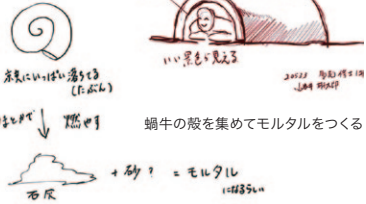
横穴を掘る



出された多様なアイデア



小ギャラリーを土でつくる



かまどをつくる

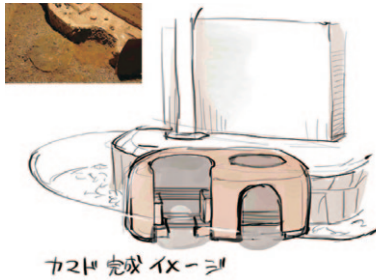
2020年10月～

落合七海(日本画3回生) 発案のかまどづくりは、土練りや日干しレンガづくりなど、基本的な技術の理解、火を囲むことによるコミュニケーション環境の改善など、さまざまな方面につながる作業で、初めて土に触れる学生にふさわしい。

かまどの位置は、6年前に高橋めぐみらがつくった囲炉裏(p.135)と同じ場所で、土間座を掘り込んだ「二口かまど」にすることが決まる。

土間座を壊して取った土(もとは大藪家土塀の土)と赤土をまぜて日干しレンガをつくり、それを積んでかまどをつくる。

現場に残る過去の作業と材料を丁寧に引き継いで、それを新しい方向に展開することも、つちのいえの創作の基本であり、かまどづくりはそのことも体感的に把握できる。



前の囲炉裏の跡を生かして、床に斜めに食い込み形で「二口かまど」をつくる。(スケッチ: 落合七海)



土間座 (cf. p.132) を掘り込む部分に当たりをつけ、固く締まった日干しレンガを割っていく。



ツルハシを使う土方作業はみな初めてだが、すぐに慣れていく。落合七海は最初から上手だった。



つちのいえでは、壊すことと創ることはたえず循環する。崩した土は集めて再び日干しレンガにする。



崩した土間座の土に赤土をまぜ、木枠に入れて日干しレンガを再生する。(cf. p.133)



土は1週間以上寝かせて乾燥させる。



日干しレンガをゆるい泥で固定しながら積んでいく。

2020年12月10日、かまどは無事完成し、翌週12月17日、コロナ対策に気をつけながら、完成を祝して、カマドでご飯を炊き、鍋を囲んだ。



一つは釜炊き用、もう一つは煮物焼き物に。



柔らかくした土を上塗りする。固定兼化粧。

つちのいへのなかで火が焚かれることは数年ぶりだった。そもそも茅葺き屋根の民家は、中で囲炉裏やカマドなどで火を焚き、燻すことで、防虫・防腐が自然となされ、持続的に維持される。



どんどん上塗りを進める。



2020/12/10

12月10日、完成。

穏やかな火は、人を養い、人と人をつなげ、住まいを生かす。

火床は、何よりも生きることの根源を思い起こさせてくれる。



2020/12/17

茅葺き屋根から久しぶりに煙が外に漏れてきたとき、屋根がうれしそうに笑っているように見えた。

ときどき火を起こしてやる必要を痛感する。

うまご飯が炊き上がった。二口なので米を炊きながら同時に煮たり焼いたりもできる。右は正月の餅焼き。



かまどの煙が室内に広がり、茅葺き屋根から外に漏れ出す。火と煙は湿り気を取り、防虫効果もある。

階段をつくる

2020年10月～

つちのいえの丘は、手入れしないと、すぐに道が草に埋もれて見えなくなる。坂や階段も通りにくくなるので、作業のはじめに草刈が必要だ。

長谷川悠太(日本画M1)の提案で、以前つくった階段(p.170-173)を改善することに取り組んだ。新開亮輔(日本画3回生)も加わった。がっしりした横木で山道の階段のような構造をつくり出す。手すりもつくる。

横木には、つちのいえの丘の大きなシラカシの倒木(p.178)を使う。杭は廃材を加工して再利用した。

風景を描く者がささやかに風景を造形する。



2020/10/29

上：草ボウボウの北側斜面を草刈りする。
右：大きなシラカシの倒木から階段に使う横木を切り出す。



2020/11/19



2020/11/6

階段を作り直す前に整地する。



2020/11/19

杭を打ち込む。



2020/11/19



手すりの支柱として、残っていた足場丸太を切って深く打ち込む。掛矢を使うのはむずかしく、最初は空振りしてしまうこともあった。

右：丸太と曲った木と番線で丈夫な手すりができる。感触を味わうつちのいえメンバーたち。



2020/12/3

階段の上部は石を使うことにし、彫刻棟から放置されていた石材を運んだ。

歩幅とバランスを考慮しながら、不ぞろいな石を配列する。



2020/12/17



2021/1/7

階段脇の樹木にじかに像を刻む長谷川裕太。小さくても環境に働きかける効果は大きい。丘に生えている樹木への直接的な造形は、意外と希少である。



石が余ったので、つちのいえと新しい横穴（次ページ）を結ぶ道にも石階段をしつらえた。



2021/1/21

横穴を掘る 2020年10月～

この辺り



2020/10/29



2021/11/19

生い茂る草を刈り終え、穴を掘る位置に杭を打つ。

酒井楓(総合芸術学3回生)のトンネル案と前瑞紀(構想設計M1)のたまり場案が融合して、斜面に横穴を掘ることになった。穴は野外ステージ前の「永遠の無観客席」(p.173)のうしろ。「穴」が「空虚」を見る体制。

穴による新しい空間をつくるために、草刈りをして土地を開拓することから始めるといのは、つちのいえ初期とまったく同じ(p.32)。それは土浮庵とも同じで(p.160)、横穴の試みは、まさに「第3のつちのいえ」と言える。



作業場所をロープで囲んで、スコップとクワ、ツルハシで作業を進める。



2020/12/3

作業には、酒井楓と前瑞紀、鄭天雨(陶磁器M1)に加え、矢野陽太(VD3回生)、小岩井琳太郎(彫刻M1)も加わった。

だが数人が入れる大きな横穴を人力で掘ることは並大抵ではない。つちのいえの丘の大半は粘土層で、掘れば粘土が出てきて、水はけも悪い。

2020年度は場所や作業の感触をつかんで、作業は次年度に続行することになった。

作業量の多いつちのいえでは、木曜午後のみという授業の枠が時間不足を招くことが多い。だが、大事な何かを見つけたり、実験意欲あるもの者のみが、「授業」の枠を越え、自発的に作業を続け、その先で、まだ見ぬ光景に出会うことができる。



鄭天雨が丘の粘土を1250°Cで焼成した。ニンニクに続いて(p.152)留学生が丘の粘土を素材化する。



2021/1/21

丘の上から穴に続く道をつくり、周囲を修景する。



2021/1/21

さらに奥に掘り進める。2020年度はここまで。

2021年度も「穴」づくりの作業は続いた。コロナ禍や参加者の減少もあり、作業はゆっくりになったが、粘り強く取り組んだ。屋根の材料となる竹は、いつもお世話になる大原野の畑さんの竹林 (p.31) からいただいた。



2021/5/31

竹をアーチにして渡し、屋根のかたちを検討する。



2021/12/9

竹によるドーム屋根の構造。土塗りのために縄をネット状にびっしり編み込んでいる。(2021/12/9)



マケットもつくった。

酒井楓によるイメージスケッチ。中で楽器を奏でる構想。(2021年6月)



2022/2/17

屋根に土を塗り付けたところ。生きものの的な形。中は意外と広い。メンテナンスが必要になるが、それも制作の一部。

京芸由来100%のスクリーンをつくる

2020年10月
～2022年2月

蛸原妃南(構想設計3回生)の取組み。

キャンパス内にたくさんいるかたつむりの殻を集め、七輪を重ねたミニ炉で焼成して石灰化し、つくったモルタルを土壁に縫って、映像を投影するスクリーンをつくる。

手探りで実験を重ね、2年がかりで完成。版築壁に塗ったオリジナル漆喰のスクリーンは、卒業制作の一部となった。



カタツムリの殻を集める。



2021/1/14

七輪二つでミニ炉を工夫。殻を焼いて生石灰に。



2021/1/21

ついに発熱反応が起こり、消石灰ができた。



ススキの穂と水をまぜて漆喰にして土壁に塗る

2021年度の展開 ツリーハウスをつくる

2021年度も班に分かれてさまざまな意欲的取組みが行われた。

- ・ ツリーハウスの制作
- ・ 畑の制作
- ・ 茶道部部室の改装

2023年に迫る芸大移転まで、つちのいえと丘はさらに変容を続けるだろうか。



上：制作中。梁の一本はワイヤーによる吊り構造。

右：できたツリーハウス（ツリーテラスといふべきか）。手づくりの縄ぼしごで上がる。落下防止の手すりもつき、草屋根を半分かけている。



畑をつくる

自給自足・土・大学の廃材と土地から、つちのいえ近くに新たに農園をつくり、生きるのに必要不可欠な食物の一つを自らの手で育て上げる。



斜面の土地を開拓。夏野菜に適した土質への改良。



オクラ、キュウリ、トウモロコシ、トマト、ナスなどが収穫できた。



スイカもできた。

茶道部部室の改装

プレハブの殺風景な茶道部部室の一角に、つちのいえのような土壁の空間をつくる。横の茶庭とつなげて茶会を催す。



茶道部部室の一角。円窓にし、廃材の鉄網と縄で土壁の地下をつくる。



前期では終わらず、土塗りは後期に。上は乾燥中の状態。